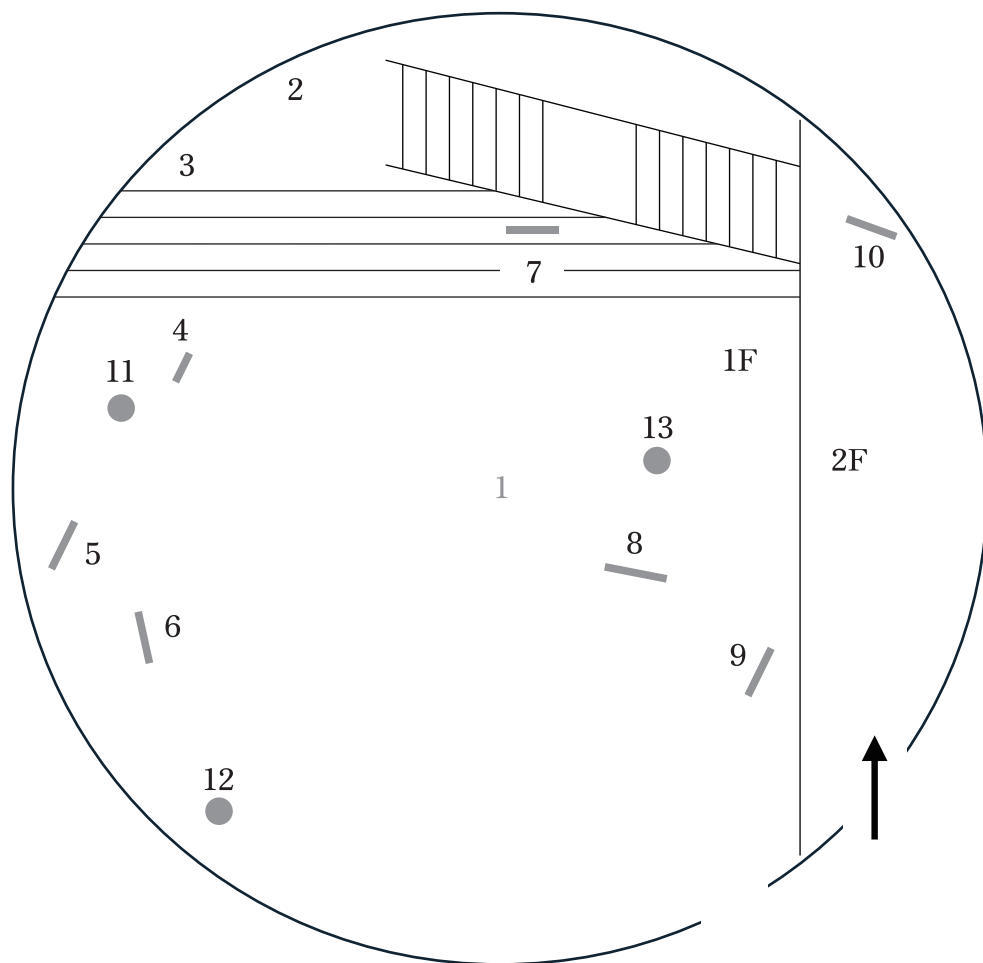


残響と余白のなかで  
In Reverberation and White Space  
今村 遼佑  
Imamura Ryosuke



1	調律と風景	2026	サイズ可変	サウンド (01:35:49)
2	自宅裏ピアノ	2026	サイズ可変	iPhone、映像 (3:00)、鉢植え、ヘッドフォン
3	ねじれと交差	2021	450×300×100mm	名古屋でもらった振り子時計、ワルシャワで買った置き時計
4	いつかのどこか #11	2025	595×105×105mm	木、LED、木漏れ日を計測したデータ、電子回路、電池
5	いつかのどこか #14	2025	715×105×105mm	木、LED、木漏れ日を計測したデータ、電子回路、電池
6	いつかのどこか #8	2025	1005×105×105mm	木、LED、木漏れ日を計測したデータ、電子回路、電池
7	いつかのどこか #6	2025	965×105×105mm	木、LED、木漏れ日を計測したデータ、電子回路、電池
8	いつかのどこか #2	2022	1730×140×85mm	木、LED、木漏れ日を計測したデータ、電子回路、電池
9	いつかのどこか #13	2025	988×75×75mm	木、LED、木漏れ日を計測したデータ、電子回路、電池
10	いつかのどこか #9	2025	990×105×105mm	木、LED、木漏れ日を計測したデータ、電子回路、電池
11	バケツと水面 #1	2026	330×330×320mm	バケツ、iPad、映像 (4:36)、バッテリー、石
12	バケツと水面 #2	2026	265×265×250mm	バケツ、iPad、映像 (3:36)、バッテリー
13	バケツと水面 #3	2026	270×270×255mm	バケツ、iPad、映像 (3:16)、バッテリー

「余白と残響のなかで」

去年の夏の終わりの頃、美術館のピアノの調律が行われるというので、立ち会って録音をさせてもらった。作業の邪魔にならないように二階で聞く。弦が叩かれて生まれた音が、空間のなかでかすかにねじれながら、時間をかけて消えていく。

-

学生の頃、春と秋のシーズンに子ども音楽教室の発表会のアルバイトをしていて、週末に各地のホールによく行っていた。午前中に舞台をセッティングして昼休憩に入る頃、入れ替わりに調律師がやってきてピアノの調律を始める。その音を楽屋でお弁当を食べながら、壁のスピーカーから聞いていた。慌ただしかった舞台が、今は最小限の照明と静寂の中であって、ピアノの音だけが響いている。空間が日常から非日常へゆっくりと変容していく、半透明で不完全な時間。

-

冬から春に変わる頃、この展覧会の搬入をしていた。寒くも暑くもない、特段、空気を意識することのない時期だった。

-

現れては、すぐに消えていくものが気になる。

-

でも、時間の尺度を変えれば全てのものがそうなのだろう。ピアノの音も、木漏れ日も人も季節も、あるいはもっと大きなものも、小さなものも。

-

そしてその背景にあるもの。

繰り返される出現と消滅のなかで、見えてくるものは入れ替わる。

-

調律のあいだ、窓からは光が差し込んで床の上で反射していた。